

石灯笼 (春日灯笼奥之院)

新平の母親利恵の96歳の誕生日を祝って、大正9年、麻布邸に「九六庵」と「石灯笼」が建てられました。その石灯笼の寄贈申し入れが当記念館にあったのが1996(平成8)年。翌年、水沢市内への搬入作業が行われました。



【工事を見守る新平】



【九六庵と石灯笼】
家族記念写真

【石灯笼寄贈の経緯】

石灯笼の建設は、上述の母親利恵の誕生日記念の「九六庵」建設と共に行われました。麻布の屋敷は、新平逝去後、満州国大使館を経て中国大使館になりました。40年程前、中国大使館新築に際し、造園工事を担当した岩崎吉一さんが、張志民一等書記官から引取りを要請され自宅に保管してきました。知人から新平の生い立ちなどの話を聞き、「ぜひ水沢に返したい」と、寄贈の申し入れをいただき、翌年、旧宅のある吉小路にほど近い大畑小路小公園に設置されたものです。

白御影石の石灯笼で、高さ約6m、重さ約15t。柱部となる竿の直径は0.9m。「春日灯笼奥之院」と呼ばれる日本形式の造りとなっています。全体に関東大震災で倒壊した跡と、東京大空襲の火災による油煙の跡が残っています。火袋に鹿(しし)と牡丹、中台にトラなど十二支が彫られています。

<奥の院型>

春日野大社奥の院の灯笼を模したもので、側面に唐獅子の彫刻。受けには十二支が右回りに、地輪には波と兎の彫刻。干支の子の面を北向設置。

【寄贈者岩崎吉一さん来館】 H30.9.17

この日、陽明学者で思想家の安岡正篤の顕彰会グループ「二土会」が企画したツアーで、28名の中の一人として、岩崎さんがほぼ20年ぶりに来館されました。

寄贈当時の担当だった市教委社会教育課課長の遠藤計悦さんと顕彰会常任理事の佐藤一晶さんが出迎えました。ツアー一行は、斎藤實記念館や盛岡市の先人記念館等も見学する予定とのことでした。

この時、取材に来ていた地元の胆江新聞記者に対して、「新平と同じ時代に活躍した原敬や新渡戸稲造といった先人とのつながりを感じることができた。戊辰戦争により東北が受けた痛手が中央に対する反骨精神となり、互いに切磋琢磨したことで、彼らのような人材が育ったのだと思う。」と語っていました。

<写真>①は来館を伝える地元紙「胆江日日」。②は平成9年の移設前の計測時。③は今年の雪深い水沢の石灯笼。(96歳の誕生日と96年の寄贈お申出。何かしら……)



①



②



③